

和  
歌  
索  
引



## あ

東路の野ちの朝露けふやさは袂にかゝるはしめ成覧 四②

東路はこゝをせにせん宇津の山哀もふかし薦のした道 二一⑨

あはれにも空にうかれし玉梓の道のへにしも名をとゝめけり

二三②

あまたゝひゆきあふ坂の関水にけふをかきりの影そかなしき

二⑬

## い

いにしへのわらやの床のあたり迄心をとむる相坂の関 二⑩

岩つたひ駒うち渡す谷川の音もたかしの山にきにけり 一三⑭

今よりは思ひ乱し蘆の海の深きめくみを神にまかせて 二八⑭

## う

植置しぬしなき跡の柳はら猶その陰を人やたのまん 一三①

## お

沖津風けさあら磯の岩つたひ浪わけ衣ぬれゝそ行 二四⑪

覚束ないさ豊河のかはる瀬をいかなる人のわたりそめけん

一三⑩

思ひ出のなくてや人のかへらまし法の形見をたむけをかすは

九⑩

## か

鏡山いさたちよりてみてゆかむ年へぬる身は老やしぬると

五①

かきつくるかたみも今はなかりけり跡は千年と誰かいひ剣

一九②

影ひたす沼の入えにふしのねの煙も雲も浮嶋かはら 二六⑪

かはらしな我もとゆひに置霜も名にしおいその杜の下草 六②

かへるへき春をたのむの雁かねもなきてや旅の空に出にし

三三⑥

## き

清見かた磯へに近きたひ枕かけぬ浪にも袖はぬれけり 二四③

清見かた関とはしらて行人も心計はとゝめをくらむ 二三⑫

## こ

言のはの深き情は軒端もる月のかつらの色にみえにき 一五②

此河のはやき流も世中の人の心のたくひとは見す 一七①

はそのたのむ木のもと岡へなる松の風に心してふけ 二〇①

はそのつりする海士の筈庇いとふありかや袖にのこらん

二七⑩

## さ

さゝ波や大津の宮のあれしより名のみ残れるしかのふる郷

さひしさは過こしかたの浦々もひとつなかめの沖のつり舟

三二⑦

さひしさは過こしかたの浦々もひとつなかめの沖のつり舟  
 冴る夜に誰こゝにしもふしわひて高ねの雪を思ひやりけん

三〇⑥

二五⑥

し

しらさりき秋の半の今宵しもかゝる旅ねの月をみるとは

七⑬

せ

せきかけし苗代水の流きて又あまくたる神その神

二八④

そ

夫ならぬたのみはなきを古郷の夢路ゆるさぬ滝の音哉

二九⑥

た

たちよらてけふは過なん鐘山しらぬ翁のかけはみすとも

五④

たのもしな入江に立るみをつくし深き験の有と聞にも

一六⑥

旅衣すその庵のさむしろにつもるもしるきふしのしら雪

二四⑭

玉くしけ二村山のほのくくと明行末は波路なりけり

一〇⑤

玉よする三浦かさきの波まより出たる月の影のさやけさ

三〇⑧

な

浪の音も松の嵐もいまの浦に昨日の里の名残をそきく

一七⑨

なれぬれは都を急く今朝なれとさすかなこりのおしき宿哉

三四②

は

花ならぬ色香もしらぬ市人の徒ならてかへる家つと

八⑤

花ゆへにおちし涙のかたもとや稲葉の露を残しをくらん

一〇⑪

ひ

日数ふる旅のあはれは大井河わたらぬ水も深き色かな

一九⑩

ふ

ふしのねの風にたゞよふ白雲を天津乙女の袖かとそみる

二五⑬

踏かよふ峯の梯とたえて雲にあとゝふ佐夜の中山

一八⑥

古郷は日をへて遠くなるみかたいそく汐干の道そくるしき

九⑭

故郷へ帰る山ちのこからしにおもはぬほかの錦をやきむ

三三⑫

み

道のへに清水なかるゝ柳かけしはしとてこそたちとまりつれ

六⑧

道のへの木陰の清水むすふとてしはしすゝまぬ旅人そなき

六⑪

都出ていくかもあらぬこよひたにかたしきわひぬ床の秋風

五⑪

見渡せは千本の松の末遠みとりにつゝく波のうへ哉 二七④

も

もろともにゆかぬ三河の八はしを恋しとのみや思ひわたらん

一〇⑭

ゆ

行とまる旅ねはいつもかはらねとわきて浜名の橋そ過うき

一四⑨

行人もとまらぬ里となりしより荒のみまさるのちの篠原 四⑫

ゆふたすきかけてそ頼む今思ふことのまゝなる神のしるしを

一七⑬

よ

よしや君昔の玉の床とてもかゝらむのちはなにゝかはせん

二二⑬

世の中を漕行舟によそへつゝなかくし跡を又そなかくむる 三⑫  
世をいとふ心のおくや濁らましかゝる山辺の住居ならては

二一⑥

わ

別路に茂りもはてゝ葛のはのいかてかあらぬかたに返りし

一一⑦

我も又こゝをせにせんうつ山の分て色ある蔦のした露 二二⑫